

フェドシューク
『古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科』(その4)

Ф. А. Федосюк

Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一
岡 部 由 佳
小 林 慎 吾
村 松 多恵子

これは「文化と言語」56号(2002年3月)、57号(2002年10月)、62号(2005年3月)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである。9章、1章、2章に続いて、今回は3章を訳出することとした。今回の翻訳作業も、大学院生が主体となり、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルでおこなった。3章は6節からなるが、岡部が1節の3分の2、小林が1節の3分の1と2節、村松3-6節を分担し、最後に鈴木が全体的な文体の統一を図った。

注についても前回同様である。訳注は[]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を並列するようにしたのも前回同様である。

第3章

度量衡

Меры и веса

1 節

長さの単位

Меры длины

ロシアでは、1925年にメートル法と国際的な単位システムが導入されるまで、いわばロシア式とでも言うべき独自の度量衡が使われていた。ロシア革命前の文学作品を繙けばふんだんに出会う、このロシア式度量衡の諸用語は、現代の読者にとっては皆目見当のつかない代物となっている。

そうした難解な度量衡用語であっても、その正体を明らかにするのは大いに有益なことと思われる。まずは長さの単位から始めよう。

誰もが知っている言葉〈ヴェルシヨーク вершок〉は、何か短かな、取るに足りない長さを示す単位である。未成年や子供のことは今でも「チビ助 от горшка два вершка」と言われる¹。語源は「最上部 верх」、つまり、新芽の部分、地面から首を伸ばした茎の部分を指す言葉である。1 ヴェルシヨークは、およそ 4.45 cm である。

高利貸の老婆のもとへ向かうとき、「ラスコーリニコフは外套の内側に斧を吊り下げるため、シャツを引き裂いて幅 1 ヴェルシヨーク [=4.45]、長さ約 8 ヴェルシヨーク [=35.6 cm] の紐を作った чтобы подвесить топор к пальто изнутри, Раскольников из рубашки выдрал тесьму в вершок шириной и вершков в восемь длиной」。この紐が重い斧を吊り支えたのである(ドストエフスキー『罪と罰』[1部6章])。

¹ 直訳すれば「おまるから 2 ヴェルシヨーク [=9 cm]」である。つまりおまるにようやく跨るくらいの背丈しかないということであろう。

グリニョーフは「胸に1.5ヴェルショークの傷を負った ранен в грудь на полтора вершка」[『大尉の娘』5章「恋」]——とサヴェーリイチは両親に書き送っている。つまり、グリニョーフは6.5cm以上の傷を負ったということである。

ドストエフスキーの『死の家の記録』では囚人たちについてこう書かれている——「誰の背中にも直径約2ヴェルショークの黒い円が縫い取られていた На спине у каждого вышит черный круг вершка два в диаметре」[2部5章「夏の季節」]。つまり、この黒い円の直径は9cmということになる。

トルストイの長篇『復活』では、監房のドアというドアに「直径0.5ヴェルショークの覗き穴がある дырочки-глазки — в полвершка в диаметре」と記されている[1部51章]²。

以上の引用の意味は理解可能である。だがそれではいったいどうしてトゥルゲーネフの『ムウムーМуму』では、聾啞の豪傑、屋敷番のゲラーシムについて「身長12ヴェルショークの男 мужчина двенадцати вершков роста」と語られているのだろうか。ゲラーシムの身長はせいぜい50センチそこそこだったとでも言うのだろうか。

しかし、このような「訳の分からないこと несуразность」に出会うのは、何もトゥルゲーネフの作品に限ってのことではない。ドストエフスキーの『白痴』を読めば、ロゴージンの仲間に「どこの馬の骨か分からないが、12ヴェルショークほどもある大男 какой-то огромный, вершков двенадцати, господин」がいたと書かれているのである[1部10章]。

また『罪と罰』を読むと、高利貸の老婆の妹にあたる背高のリザヴェータは、「その身長は少なくとも約8ヴェルショーク[≒35.6cm]по крайней мере, восьми вершков росту」とされている[1部6章]。

『罪と罰』ではさらに、ラスコーリニコフがドゥーニャに惚れている親友の

² 引用が1部51章からのものだとなれば、原文と若干異なっている。原文ではこうなっている——「ドアというドアには、俗に目玉と呼ばれる、直径0.5ヴェルショークの小さな穴があいていた В дверях были дырочки, так называемые глазки, в полвершке в диаметре」。なお0.5ヴェルショークは2cm強。

のっば、ラズミーヒンを嘲笑的に、「身長 10 ヴェルシヨーク [=44.5 cm] のロメオ Romeo десяти вершков росту」と呼んでいる[3部4章]。

レールモントフの物語詩『子供のための童話 Сказка для детей』では、大邸宅の家主である威風堂々たる老人について、「彼の身長は 12 ヴェルシヨーク あった Он ростом двенадцати вершков」[16連1行目]と語られている。

身長 12 ヴェルシヨーク、あるいは 13、14、15 ヴェルシヨークの巨人というのは、ロシア文学にふんだんに登場する。たとえばチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』にはこう書かれている——「船曳のニキートウシカ＝ローモフは身長 15 ヴェルシヨーク [=66.75 cm] の巨人で、体重は 15 プウト [=246 kg] あった Никитушка Ломов, бурлак, был гигант 15 вершков росту, весил 15 пудов」[3部29章「特別な人間」]。レスコフの短編『不死身のゴロヴァーン Несмертельный Голован』を読めば、主人公のゴロヴァーンの身長が「ピョートル大帝同様、15 ヴェルシヨークだった В нем было, как в Петре Великом, пятнадцать вершков」[2章]ことが分かる。

ここにはいったいどんな謎が隠されているのだろうか。

じつはその昔、人間の身長はしばしば、正常な人間に不可欠とされる身長 2 アルシン 2 аршина(つまり 1 m 42 cm/[1 аршин=約 71 cm])を越え出た部分のみで表示されていたのである。だとすれば、『ムウムウー』に出てくるゲラシムの身長は 1 m 95 cm で[2 アルシン+12 ヴェルシヨーク=1 m 42 cm+53.4 cm=1 m 95.4 cm]、ニキートウシカ＝ローモフの身長は 2 m 9 cm[2 アルシン+15 ヴェルシヨーク=1 m 42 cm+66.75 cm=2 m 8.75 cm]であったということになる。その他の例もまた、単純な算式を使えばセンチメートルに置き換えるのは容易であろう。ヴェルシヨークをセンチメートルに換算し、それに 142 cm プラスするだけでいいのだから。

ゴーリキーの戯曲『町人 Мещане』では機関士のニールが、当時は万人周知のはずのこの表示法を知らないといったふりをしている。そして彼は、自分の夫は「身長が 12 ヴェルシヨーク あった (ее муж) был двенадцати вершков роста」と自慢するエレナを虚仮にしようと、「お宅の旦那はそんなに背が低

かったのかい? Он был так низок?»と尋ねている[第2幕]。現代の観客にとってここに潜む嘲笑の意図は、もはや分かりかねるものであろう。

この身長を表示法はまた、馬の身長にも適用された。セルゲイ・アクサーコフは『孫バグロフの幼少時代 Детские годы Багрова-внука』の中で、「馬たちは大きく、その背丈は4ヴェルシヨークあった Лошади были крупные, четырехвершковые」と書いている。これはもちろん、馬たちの背丈が18cmしかなかったということではない。

〈**ピャーチ(指尺)Пядь**〉とは、大きく精一杯伸ばした親指と人差指の間の距離のことである。もちろん、人によって親指と人差し指間の距離は違うので、「指尺」による測定が正確というわけにはゆかなかった。「1ピャーチ」は「4ヴェルシヨーク」、あるいは「 $\frac{1}{4}$ アルシン」と取り決められていたが[≒18cm]、実際に「指尺」が使用されることは滅多になかった。というわけで「ピャーチ」や、その同義異形の〈**ピャデーニ пядень**〉が文学で使用される場合は、直義ではなく、転義においてであった。たとえばそれは、「秀でた額」、つまり「利口である」ことを意味する「7ピャーチの額 семи пядей в лбу」、それに僅かな譲歩もしないという意味の「1ピャーチといえども譲らない ни пяди не уступлю」といった決まり文句に登場する。アレクセイ・コンスタンチーノヴィチ・トルストイの戯曲『皇帝フョードル・イオアンノヴィチ Царь Федор Иоаннович』ではボリス・ゴドゥノーフがこう語っている——「…王には1ピャーチたりとも／ロシアの土地を譲り渡しはしない…королю ни пяди / Не уступили русской мы земли」[第2幕「王宮で」]。プウシキンの『大尉の娘』ではプウガチョーフがこう叫んでいる——「わが手下のいったい誰がその孤児をいじめられるというのだ。そいつはたとえ額が7ピャーチあろうとも[いくら利口でも]、決してわしの裁きは逃れられまいよ Кто из моих людей смеет обижать сироту?.. Будь он семи пядень во лбу, а от суда моего не уйдет」[11章「叛徒の本陣」]。

長さの単位としてはるかに広く人口に膾炙していたのは〈**アルシン аршин**〉である。「1アルシン」は「16ヴェルシヨーク(4ピャーチ)」、ある

いは「71 cm」にあたる。アルシンはタタール語からの借用語で、タタール語では長さの単位としての「ローコチ локоть」を意味した³。「アルシン」を「センチ」へ換算する方法が分かれば、古典作家の作品中に表れる記述の多くが理解可能なものとなるだろう。

「まだ1アルシンにも達していない若いひこばえたちが、その細く滑らかな幹で黒ずんだ低い切り株を取り巻いていた Молодые отпрыски, еще не успевшие вытянуться выше аршина, окружали своими тонкими, гладкими стебельками почерневшие, низкие пни」(トゥルゲーネフ『獵人日記』、「クラシーワヤ・メーチのカシヤン」)。

ネクラソフには次のような詩句がある——「わしらの川という川に水が溢れ / 3アルシン[≒213 cm]もの深さになった Наши реченьки водой / Налились на три аршина」⁴。これは、川の増水が深刻だということである。

プッシュキンの『スルタン王物語』では、グヴィドン王子についてこう記されている——「神さまは彼らに1アルシンの息子を授けた Сына Бог им дал в аршин」[4連]。ここにはもちろん、御伽噺的な誇張がある。新生児の身長が55 cmを越えることなど滅多にないからである。

スメルヂャコーフの母親は、「とても小柄な娘で、彼女の死後町の信心深い老婆たちの多くが目を潤ませながら回想したところによれば、背丈はせいぜい『2アルシン[≒142 cm]そこそこ』だった была очень малого роста девка, «двух аршин с малым», как умилительно вспоминали о ней после ее смерти многие из богомольных старушек нашего городка」(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』[3編2章])。

現在の店では布地を計るのにメートル法の物差しが使われているが、革命以前はヴェルシヨーク[≒4.45 cm]の目盛りを刻んだ1アルシン[≒71 cm]の物差しが使われていた。この物差しもまた「アルシン」と呼ばれた。そこから「アル

³ 「ローコチ」は「肘」の意味だが、肘の長さ(≒約50 cm)が長さの単位として使われていた。

⁴ 引用は『村のニュース Деревенские новости』の一節と思われるが、だとすると字句が若干異っている——「Наши речонки водой / Налило на три аршина」。

シン物差しを飲み込んだような как аршин проглотил」という、「不自然なまでに背筋を伸ばして立っている人」を指す決まり文句や、「自分勝手な基準で評価する」という意味の「自分のアルシン物差しで計る на свой аршин мерить」という決まり文句が生まれたのである。アルシン物差しの長さが一定でなかったことは、ゴーリキーの短編『ニールウシカ Нилушка』が教えてくれる。そこでは商人ヴォロゴノフが、「せいぜい15ヴェルシヨーク[≒67 cm]ほどの使い古されたアルシン物差しで仕切り壁を叩いて стучит в переборку обмызганным аршином, в котором не более пятнадцати вершков」いるが、1アルシンの正確な長さは、もはや周知のように、16ヴェルシヨークだからである。

サルティコフ＝シチェドリンの『ゴロヴリョーフ家の人々』には、ゴロヴリョーフ家の領地には「半アルシン[≒36 cm]以上もある鮒がいる караси больше в пол-аршина есть」と書かれているが[1章「家庭裁判」]、これは明らかに誇張である⁵。またチェーホフの短編『葦笛 Свирель』では、牧夫がこう言って自慢している——「俺たちのペスチャンカ川でだって、今でも覚えているが、1アルシンもあるカワカマスが獲れたもんだ В нашей Песчанке, помню, щука в аршин ловилась」。

『アンナ・カレーニナ』の競馬の場面を覚えておいでだろうか？ あの場面では競馬場の障害として、幅が3アルシン[≒213 cm]の堰き止められた川、それに幅2アルシン[≒142 cm]の水を張った溝などが描かれている。そしてヴロンスキーはその溝を飛び越えるときに手綱捌きを誤り、落馬することになるのである[2部25章]。

トルストイの長篇『復活』では監獄での面会が描かれているが、そこでは囚人たちと面会に訪れた人々を分け隔てているのは、3アルシン(つまり2m強)の距離である。だから、全体的などよめきの中で対話者同士の言葉が非常に

⁵ ちなみに3章「家族の破局」には、「20フントの鮒[≒8 kg]」も出てくるが、これもまた誇張であろう。

聞き取り難いとしても、それは別に驚くべきことではないのである[1部41章]。

〈サージェニ Сажень〉は「3アルシン」、あるいは「2.13 m」にあたる。

タラス・ブーリバの下の息子、アンドリーの身長は「ちょうど1サージェニ」である[『タラス・ブーリバ』1章]。そんな大男など滅多におらず、そこには明らかに、ゴゴリには珍しくない誇張が含まれていよう。ソバケーヴィチは死んだ大工のステパン・プロープカのことを自慢しているが、この大工はどうやら背丈が3アルシンと1ヴェルショーク[≒218 cm]もあつたらしい[『死せる魂』[5章]]。

さらに強烈で典型的な誇張は、『智恵の悲しみ』に出てくる「3サージェニもの豪の者」という、フレストーフが連隊長のスカロズップに披露する人物描写の中に見ることができる[3幕2場]。3サージェニと言えば、ほとんど6.5 mのことなのだから。

『戦争と平和』を読む場合には、ロシアの騎兵中隊とフランス軍とを隔てている「300サージェニ[≒640 m]ほどの無人の空間 пустое пространство сажен в триста」を脳裏に思い描いてみるのが非常に重要である[1部2編8章]。

「サージェニ」という単位の正体が分かれば、「5サージェニ[≒10.6 m]の距離からピストルで／トランプのエースを撃ち抜いた в туз из пистолета / В пяти саженях попадал」エヴゲニー・オネーギンの腕前を想像してみるとは、たやすいことだろう[6章5連]。

ネクラソフの詩『マザイ爺さんと兎たち Дедушка Мазай и зайцы』は、誰もが子供の頃からよく知っているが、そこには次のような一節がある[2章1連]—

水は哀れな獣たちのところへ
 刻一刻と忍び寄り、足下に残されたのは
 横が1アルシン弱、
 縦が1サージェニ弱の土地だけだった。

С каждой минутой вода подбиралась
 К бедным зверкам: уж под ними осталось

Меньше аршина земли в ширину,

Меньше сажени в длину.

これはまさしくカタストロフィクな状況である。なにしろ島の面積は今や、横0.71 m、縦2.13 mしかないのだから。そのとき、これ以上はないといったタイミングのよさで、マザイ爺さんが兎を救出に駆けつけるのである。

垂直線としてのサージェニには独特の緊迫感が伴う。1サージェニ[≒2.13 m]を登り切るのはもちろん、1サージェニの高さから跳び下りるのさえ容易ではないし、ましてや2サージェニ[≒4.26 m]の高さから跳び下りるとなると、恐怖すら感じるからである。レールモントフの中編『ワジーム Вадим』は、人里離れた洞窟へ通じる道の途上にある高さ2サージェニの断崖が出てくる——「そこを跳び下りるのに、自分の足の堅固さを頼ってよいものだろうか。何と言おうと、2サージェニともなれば冗談では済まされない距離なのだ Должно надеяться на твердость ног своих, чтобы спрыгнуть туда; как ни говори, две сажени не шутка」[18章]。

トゥルゲーネフの中編『初恋』の若き主人公は、我侘なジナイーダにせがまれて、高さ2サージェニほどの壁から跳び下りる——「僕はうまく足で地面に着地したが、衝撃が激し過ぎて立っていることができなかった。僕は倒れ、一瞬意識を失ってしまった Я пришелся о землю ногами, но толчок был так силен, что я не мог удержаться; я упал и на мгновение лишился сознания」[12章]。

驚くにはあたらない。この少年は2階から跳び下りたということなのだから！

レールモントフの『現代の英雄』中の1章「タマーニ」では、ペチョーリンが100サージェニ、つまり213 m離れた岸边まで泳ぎ着けないでいる⁶。

⁶ これはフェドシュークの思い違いであろう。「タマーニ」のテキストによれば、ペチョーリンは少女と一緒に「岸边から50サージェニほどの от берега около 50 сажен」沖へ漕ぎ出た後(このとき彼は「泳げない я не умею плавать」という感想を漏らしている)、少女と格闘し、少女が海に落ちると、一人でどうにか船着場まで辿り着いているからである。

肩幅の広い人については今でも、「彼の肩幅はコサーヤ・サージェニある Y него косая сажень в плечах」という決まり文句が使われている。ネクラーフの詩『村で В деревне』に登場するカシヤーノヴナの死んだ息子は、「背が高く、鉄のようにながしりした腕で / その肩幅はコサーヤ・サージェニあった Росту большого, рука что железная, / Плечи — косая сажень」[2節2連5～6行目]と言う。通常の「サージェニ」が「3アルシン」に等しいのに対し、〈コサーヤ・サージェニ косая сажень〉は右足親指の先端から上方に伸ばし切った左手中指の先端までの距離に等しい長さの単位であった。したがって「コサーヤ・サージェニ」は通常の「サージェニ」よりも若干長いことになるが⁷、この長さの単位を額面通り受け取る必要はない。そんなに肩幅の広い人間など存在したはずもなく、ここにもまた誇張があるのである。

〈ヴェルスター-верста〉はロシアでもっとも大きな長さの単位であり、この単位で計られたのは物体ではなく、遠く隔たった距離、道路、河川などであった。「ヴェルスター」が「道路測定単位 путевая вера」と呼ばれたのはそのためである。

「1ヴェルスター」は「500サージェニ」、あるいは「1.06 km」にあたる。フォンヴィージンの喜劇『親掛かり』におけるプロスタコーワの領地は、町から3ヴェルスター離れている。ミトロファヌウシカの家教師たちはその領地へ歩いて通っているが、これはつまり彼らは往復で一日6 km 強の行程を踏破していることを意味する[1幕6場]。

しかし彼らの健脚も、あの痩せた農夫、あの1昼夜に60ヴェルスターずつ、すなわちほとんど70 km ずつを踏破することのできるラヴレツキー家の伝令に思いを致すならば、取るに足らないものである(トゥルゲーネフ『貴族の巢』[8章])。

マニーロフの領地は町の関所から15ヴェルスター[≒16 km]離れている

⁷ 「サージェニ」と「コサーヤ・サージェニ」の差はおそらく30 cm 前後と思われる。ちなみに「コサーヤ」は「斜め」の意味で、右足親指と左手中指を繋ぐ線が斜めになっていることに由来すると思われる。

(ゴーゴリ『死せる魂』[2章])⁸。オヂンツォーフの領地からバザーロフ家の領地までの距離は25ヴェルスター[≒26.5 km]である(トゥルゲーネフ『父と子』[19章])。また「モークロエ村までは20ヴェルスター[≒21.2 km]ちよつとであった До Мокрого было 20 верст с небольшим」(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』[3部8編6章])。

一般的に言って、いつもいつでも鉛筆を手に取り、正確な距離をメートル法によって算出することは、とてもお勧めできない。絶対的な正確さなど、ここでは必要ないからである。ただ「1ヴェルスター」とは「1 km 強」であることを記憶に留めているだけで十分である。そうすれば古い単位を新しい単位に大雑把に換算でき、当該の距離についての理解が容易になるであろう。

「ヴェルスター」にはまた別な意味もある。〈**ヴェルスター標識(里程標) верстовой столб**〉という意味である。この里程標は通常、目につきやすいように、白と暗い色、大抵は黒との二色で斜めの縞模様を彩色され、さらにそれら二色の間には細いオレンジ色の線が走っていた。プウシキンが『冬の道』の中で次のように歌っているのは、他ならぬこの里程標のことである[第4連]

あるは僻遠の地と雪のみ…… 行く手には
ただただ縞模様の里程標が
私を迎えてくれるだけ。

Глушь и снег... Навстречу мне
Только версты полосаты
Попадаютя одне.

⁸ マニーロフの村が町から15ヴェルスター離れていたかどうかは不明と思われる。なぜなら「2章」には、町から15ヴェルスター馬車を走らせてもマニーロフの邸を見つけられないチチコフが、「友人が15ヴェルスターだから我が村へどうぞと誘ったら、その村は30ヴェルスターはたっぷりあるものだ если приятель приглашает к себе в деревню за 15 верст, то значит, что к ней есть верных 30」ということを思い起こしているからである。したがってテキストに従えば、マニーロフの村は町から少なくとも15ヴェルスター以上離れていると考えるのが妥当であろう。

非常に背の高い人について言う、〈コロームスカヤ・ヴェルスター-коломенская верста〉という表現は、この里程標に由来する。つまりこの表現は、皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチ〔在位 1645-1676。ピョートル大帝の父親〕の命令でモスクワと皇帝の宮殿があったコロームスコエ村の間に設置された背高な里程標に因んでいるのである。

最後にまとめとして、ロシアの長さの単位（「ピャーチ пядь」を除く）とメートルとの簡単な換算表を示しておこう。

①	1 ヴェルシヨーク (вершок)		≒4.45 cm
②	1 アルシン (аршин)	=16 ヴェルシヨーク	≒71 cm
③	1 サージェニ (сажень)	= 3 アルシン	≒2.13 m
④	1 ヴェルスター (верста)	=500 サージェニ	≒1.06 km

2 節

面積の単位

Меры площади

ロシアの広さの単位は「平方アルシン квадратный аршин」〔 $0.71\text{ m} \times 0.71\text{ m} \approx 0.5\text{ m}^2$ 〕、「平方サージェニ квадратная сажень」〔 $2.13\text{ m} \times 2.13\text{ m} \approx 4.54\text{ m}^2$ 〕、「平方ヴェルスター квадратная верста」〔 $1060\text{ m} \times 1060\text{ m} = 1123600\text{ m}^2 = 112.36\text{ ha}$ 〕等々、その名称において長さの単位と相似している。だが「平方」という形容辞は原則的に省略され、その省略は暗黙裡に前提される決まりであった。

トルストイの『復活』においてカチューシャ・マースロワが収容される監房の狭さは、古い単位をメートル法へ換算してみれば一目瞭然である——「マースロワの監房は奥行き 9 アルシン〔 $\approx 639\text{ cm}$ 〕、幅 7 アルシン〔 $\approx 497\text{ cm}$ 〕の細長い部屋だった Камера Масловой была длинная комната в 9 аршин длины и 7 ширины」〔1部 30章〕。計算してみると、彼女の監房は 30 m^2 ちよつとの広さであることが分かる〔 $(0.71\text{ m} \times 9) \times (0.71\text{ m} \times 7) \approx 31.76\text{ m}^2$ 〕。監房には 15 人収容さ

れているから、各人の割り当て分は 2 m^2 ということになる。

同じ長篇中に、地主ネプリュードフが訪ねてゆくマトリョーナ婆さんの住居は、「6平方アルシンだった была шести аршин」とある[2部5章]。つまり彼女の住まいはおよそ 3 m^2 [$0.5\text{ m}^2(1\text{平方アルシン})\times 6 = 3\text{ m}^2$]の広さだったことになる。

まったく同じ居住面積を持っているのは、トルストイの短編『地主の朝 Утро помещика』に出てくる子沢山の百姓チュウリスの「黒ずんでいて悪臭の漂う черная смрадная」住居で、地主は彼を10平方アルシン[$0.5\text{ m}^2(1\text{平方アルシン})\times 10 = 5\text{ m}^2$]の家へ転居させようとしている[3章]。同じ短編中に出てくるダヴィトカ・ベールィの6平方アルシンの住居は、「煙突の壊れた暖炉、夏季であるにもかかわらず片付けられていない機、曲ってひびが入った天板の黒ずんだテーブルに占領されていた всю занимали печь с разломанной трубой, ткацкий стан, который несмотря на летнее время, не был вынесен, и почерневший стол с выгнутою, треснувшею доскою」[9章]。

〈**デシャチーナ десятина**〉という面積単位は一人屹立している。これは、ロシア古典文学の世界で不断に出会う所有地面積の単位である。「1デシャチーナ」は「2400平方サージェニ」、あるいは1.092 haに等しい[ただし先述した「1平方サージェニ $\doteq 4.54\text{ m}^2$ 」を前提すれば、「2400平方サージェニ」は $4.54\text{ m}^2\times 2400 = 1.0896\text{ ha}$ となる]。要するに、「1デシャチーナ」はほぼ「1 ha」ということだが、このことはぜひとも覚えておくべきだろう。

以上のことを踏まえれば、農奴制農民と地主の耕地面積の差がどれほど激しかったかが歴然とするだろう。農奴制農民の分与地は通常2～3デシャチーナであり、最悪の場合は1デシャチーナでしかなかった。コリツォーフの詩『耕作者の歌 Песня пахаря』の一節を思い起こそう——「さあ馬よ、そろそろと歩め / 1デシャチーナの耕作地を Ну! тащися, сивка, / Пашней, десятиной」[冒頭2行]。この耕地面積は、大抵の場合、子沢山の農奴制農民一家が1年を暮らすにはあまりにも不十分なものであった。いわんや地主は農奴制農民に生産性の劣悪な痩せた土地を分与するのが常だったから、なおさらである。それに対して地主の耕作地は何百、何千デシャチーナもの広さを持っていた。

コンスタンチン・レーヴィンは、カラジンスキー郡に⁹ 3000 デシャチーナの農地を持っている(トルストイ『アンナ・カレニナ』[1部5章])。

ネフリュードフの母親は、「持参金として約1万デシャチーナの土地をもらった получила в приданое около 10 тысяч десятин」(トルストイ『復活』[1部12章])。

またリゴフスコイ公爵は、2万デシャチーナの森を巡って国を相手に訴訟を起こしている(レールモントフ『リゴフスカーヤ公爵夫人』[3章])。

こうしたデータはロシア文学中に山とある。

1861年の農奴解放後、地主の土地は次第に、進取の気性に富んだ目敏い富農の手に渡ってゆくようになる。ゴーリキーの中編『フォーマー・ゴルデーエフ』では百万長者のシチュウロフがこう言っている——「……俺は若い頃は百姓で、2.25 デシャチーナの土地しか持っていなかったが、老境に差し掛かる頃までにそれを11000 デシャチーナにまで増やしたのだ。しかもどれも森つきの土地をな …был я в молодости мужик, а земли имел две с четыю (четвертью — Ю. Ф.) десятины, а под старость накопил одиннадцать тысяч десятин и все под лесом」[第7章]。

ロシア古典文学の舞台となっている地主屋敷の広さを脳裏に思い描いてみるのも有益なことである。フョードル・カラマーゾフの邸宅を取り囲む庭は、「約1 デシャチーナか、あるいはそれを少し上回る程度の広さだった был величиной с десятину или немногим более」[ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』1部3編3章]¹⁰。一方シェーレストフ家の「庭は広大で、4 デシャチーナ あった сад был большой, на четырех десятинах」(チェーホフ『わが人生 Моя жизнь』¹¹)。

⁹ フェドシュークは「カリヤジンスキー郡 Калязинский уезд」としているが、「カラジンスキー郡 Каразинский уезд」の間違いと思われる。

¹⁰ ただしこの庭はフョードル自身のものではなく、フョードル邸の隣に住むマリヤ・コンドラチエヴナ母娘の庭である。

¹¹ この引用原典の指摘はフェドシュークの間違い。引用部があるのは『わが人生』ではなく、『文学教師 Учитель словесности』の第1章である。

しかし、「1 デシャチーナ」がいつでも「2400 平方サージェニ」に等しかったというわけではない。古くはく**ホジャーイストヴェンナヤ・デシャチーナ** **хозяйственная десятина** という単位もあった。それは通常の「デシャチーナ」よりもやや大きく、「3200 平方サージェニ」[$3200 \div 2400 \times 1.092 \text{ ha} = 1.456 \text{ ha}$]、あるいは「3600 平方サージェニ」[$3600 \div 2400 \times 1.092 \text{ ha} = 1.638 \text{ ha}$]に相当した。サルティコフ＝シチェドリンの『ゴロヴリョーフ家の人々』に出てくるイウドゥシカが夢見ているのは、この単位のことには他ならない——「当時はホジャーイストヴェンナヤ・デシャチーナという、今のデシャチーナの1.5倍にあたる単位でしたからね Тогда десятина-то хозяйственная была, против нынешней в полтора раза побольше」[4章「滅びの人」]。

もしも話題となっているのが農業耕作地でなければ、面積は「デシャチーナ」ではなく、「平方ヴェルスター」[$1060 \text{ m} \times 1060 \text{ m} = 1123600 \text{ m}^2 = 112.36 \text{ ha}$]で算出されるのが常だった。クूपリーンの『モレク神[多大の犠牲を強いるフェニキアの神]Молох』にはこう書かれている——「…… 50 平方ヴェルスターにわたって広がる工場の巨大なパノラマが現れた ...открылась огромная панорама завода, раскинувшегося на пятьдесят квадратных верст」[「50 平方ヴェルスター」= $112.36 \text{ ha} \times 50 = 5618 \text{ ha}$ / 「第1章」]。

3 節

重量の単位

Меры веса

最初に一覧表を掲載しておこう。

①	ゾロトニーク (ЗОЛОТНИК)		≒4.26 g
②	ロート (ЛОТ)	= 3 ゾロトニーク	≒12.79 g
③	フウント (ФУНТ)	= 32 ロート	≒410 g
④	プウト (ПУД)	= 40 フウント	≒16.38 kg
⑤	ベールコヴェツ (берковец)	= 10 プウト	≒163.8 kg

〈ゾロトニーク золотник〉は、分銅として用いられていた同じ名前の金貨に由来する重量単位である。そこから、「ゾロトニークは小さくても価値がある Мал золотник, да дорог」という諺が生まれた。この諺は、見た目はぱっとしないが、実際には価値があるものについて使われる¹²。「ゾロトニーク」で売り買いされていたのは、茶や砂糖といった家事で少量ずつ消費される商品である。オストロフスキーの戯曲『額に汗したパン Трудовой хлеб』に登場するチェプーリンは、二塊の砂糖をもらっている——「2 ゾロトニーク[≒8.5g]だけ。角砂糖は今日日、とても高価だからね два золотника — рафинад нынче в цене」[1幕7場]。サルティコフ＝シCHEDリンの『僻地の旧習 Пошехонская старина』ではアンナ・パーヴロヴナが、「バターの塊に指で線引きしながら、コックがねだる余分なゾロトニークのことでくたくだと言い争う проводит пальцем черту на комке масла и долго спорит из-за лишнего золотника, который выпрашивает повар」のである[4章「地主屋敷の一日」]。ゴーリキーの短編『ステップで В степи』には、「5 ゾロトニークほどのパン切れ кусочек хлеба золотников в пять весом」のことが言及されている。これはごく小さな、20g 少々 of パン切れのことである。

〈ロート лот〉という今日では忘れられてしまった重量単位で量られていたのは、花の種子や郵便物、宝石に準ずるような高価な石などであった。ドストエフスキーの『罪と罰』には、こう記されている——「ラスコーリニコフの母からの手紙は大きくてずっしりしており、2 ロートもの重さがあった。2 枚の大型便箋には細かい字でびっしり書き込まれていたのだった Письмо от матери Раскольникова было большое, плотное, в два лота: два большие почтовые листа были мелко-мелко исписаны」[1部3章]。つまり、この手紙の重量はほぼ26g あったということである。ゴンチャロフの『懸崖 Обрыв』では、老婆が自分の貴重品を分けながら、こう言っている——「いい

¹² 日本流に言えば「山椒は小粒でもぴりりと辛い」。

かい、ヴェーロチカ、これがお前の分で、これがマールフェニカの分だよ。糸に通した真珠一連たりとも、1ロートたりとも、どちらかが余分にもらうなんてことはないからね Вот, смотри, Верочка, это твое, а то Марфенькино — ни одной нитки жемчуга, ни одного лишнего лота, ни та, ни другая не получит」[3部19章]。

〈フウント фунт〉という重量単位で量られていたのは、パンやキャンディー、バター、そしてほとんどすべての食料品である。また当時は灯油でさえも「フウント」で量られていて、灯油1フウントは1.5コペイカであった。『カラマーゾフの兄弟』に出てくるスキマ修道士フェラポントは、「3日に2フウント[≒820g]ずつのパンを食べるだけで、それ以外は何も食べなかった ел всего лишь по два фунта хлеба в три дня, не более」[2部4編1章]。『戦争と平和』を読んで分かるのは、過酷な戦時下においてパヴログラツキー連隊では、「最後の乾パンが薄く引き延ばされ、一人あたり半フウントしか配給されなかった растягивали последние сухари: выдавали только полфунта на человека」ということ、つまり、一日に配給されたのは200gというごく僅かなパンだけだったということである[2部2編15章]。

『ゴロヴリョーフ家の人々』ではメロンのことが話題になっている — 「どれもが20フウントもあるとは、いやはやなんともすごいメロンだ! по 20 фунтов весу — вот какие дыни!」[2章「肉親らしく」]。これは本当に見事なメロンである。なにしろ、どれもが8kg少々の粒揃いなのである。

フウントの8分の1、すなわち50gは通常、〈オシムウーシカ осьмушка〉と呼び習わされていた。この重量単位についてはゴーリキーの自伝三部作の中で触れられている — 「私たちはお茶を3ゾロトニーク[≒13g]、砂糖を1オシムウーシカ買ったものだった…… Мы покупали три золотника чая, осьмушку сахара...」[『幼年時代』第13章/ちなみに「自伝三部作」とは『幼年時代』(1913)、『世間で』(1918)、『私の大学』(1923)のこと]。

ロシア古典文学の世界では、「6本1フウントの獣脂蠟燭 шестериковая сальная свеча」、「5本1フウントの蠟燭 пятериковая свеча」等々といった表

現にしょっちゅう出会う。グレープ・ウスペンスキーの短編『模範的な家族
Примерная семья』では、登場人物たちが燃え溶ける蠟燭のことで愚痴をこぼし、次のようなやりとりをしている——「『4本1フントの蠟燭を点すのですか?』『4本1フントの蠟燭です』『Вы четверик палите?』—「Четверик」」。こうした蠟燭の正体を明らかにすることは、史料なしでは不可能である。とはいえ、こうした通俗的な呼び名もまた「フント」と結びついていた。すなわち、「6本1フントの蠟燭 шестериковые свечи」は6本まとめて1フント、「5本1フントの蠟燭 пятириковые свечи」は5本まとめて1フント等々[「4本1フントの蠟燭 четверик」は4本まとめて1フント]といった決まりの上で売り買いされていたのである。蠟燭は軽ければ軽いほど、燃え溶ける速度は緩慢であった。

〈**Пу́т пуд**〉は誰もが御馴染みの重量単位で、公的な使用が禁じられたのはつい最近のことではない。1プットは約16 kgである。古典文学でこの重量単位はしばしば、誇張表現として用いられる。ゴーゴリ描くタラス・ブーリバが、「愛馬〈悪魔〉に跳び乗ると、馬は20プードもの重荷をその背に感じ、狂暴に跳び退った。というのもタラスは異常に重く、太っていたからである вскочил на своего Черта, который бешено отшатнулся, почувствовав на себе двадцатипудовое бремя, потому что Тарас был чрезвычайно тяжел и толт」[『タラス・ブーリバ』1章]。だが、ブーリバの体重をkgに換算するなど無意味なことである。勇猛果敢なコサック、タラスといえど、327 kg[16.38 kg×20]もあるはずがないからである。これはゴーゴリ常套の誇張法なのである。

同様のことは『知恵の悲しみ』についても言える。そこではファームウソフがこう言っている——「……私が勤務していたのはエカテリーナ女帝の御世のことだ。/ 当時は誰も彼もが40プットもの堂々たる体躯で…… …При государыне служил Екатерине. / А в те поры все важны, в сорок пуд…」[2幕]。ここでの40プット[≒16.38 kg×40≒655 kg]はもちろん、重量の単位ではなく、もしもこう言ってよいなら、社会的重要度の計量単位である。

稀にだが、地方特有の重量単位も存在した。たとえば、ヴォルガ川流域では〈バトマン батман〉という単位があったが、これは「10 フウント」[$\approx 410 \text{ g} \times 10 \approx 4.1 \text{ kg}$]に相当する。ゴーリキーの中編『世間で В людях』に出てくる労働者ミーシカは、賭けをした挙句、2時間で1バトマンの腿肉を、つまり、およそ4 kgの腿肉をたいらげている[第12章]。

クゥプリーンは、かつてモスクワの「謝肉祭(=バター祭)масленица」では法外な量のプリン[クレープに似た食べ物]が食べられていたことを回想し、薄笑いを浮かべながらこう書いている——「……そこで消費された数字は天文学的なものであった。総計しようとするれば、まずはプウトで計算し始め、ついでベールコヴェツ、それからトンへと単位を移し、そしてついには6本マストの貨物船単位で勘定しなければならなかったらう ...цифры тут астрономические. Счет приходилось бы начинать пудами, переходить на берковецы, потом на тонны и вслед за тем уже на грузовые шестимачтовые корабли」[「ベールコヴェツ」は10プウトに等しく、約163.8 kg]。

4 節

穀類の容量単位

Меры емкости для сыпучих товаров

ここで扱うのは、かつて主として穀物の種子を、ごくまれには穀物の粉末や挽き割りを量るときに使用した様々な容量単位である。規格や湿度がまちまちであるために、それらの容量単位は絶対的に唯一無二の正確なものではありえなかった。そのため、容量単位は次第に重量単位に締め出されてしまうことになった。とはいえ、それらの容量単位は古典文学の世界では不断に出没し、現代の読者を苦境に立たせてしまう。現代の読者には商品の容量が想像できないからである。

実際、プウシキンの『ゴリューヒノ村の歴史』に出てくる村の寺男の年代記を読めば、ベールキンがこの村を「1チェートヴェルチ[$\approx 210 \text{ l}$]」の燕麦と引

き換えに手に入れたことが分かるが¹³、「1 チェートヴェルチの燕麦」とは、いったい多量なのか、少量なのかは不明である。シCHEDロリン描くイウードウシカ・ゴロヴリョーフは物乞いする百姓に「1 チェートヴェルチ[≒210ℓ]と1 オシミンカ[≒105ℓ]のライ麦 четверть ржицы и осьминку」を貸し与えている[『ゴロヴリョーフ家の人々』6章「滅びの人」]。また『アンナ・カレーニナ』には、「うちでは爺さんもまた、3 オシミンカ[≒315ℓ]の種を蒔いていましたよ У нас старик тоже три осьминки посеял」という一節がある[2部13章]。さらにチェーホフのヴォードビル『熊』では、女地主がスミルノフの馬のために「1 オシムウシカ[≒3.3ℓ]の燕麦 осьмушку овса」を分けてやるよう言いつけている、といった具合である。

粒状の物質を計量するためのもっとも大きな単位は〈チェートヴェルチ четверть〉、あるいは〈クウリ куль〉であった。「クウリ」とはチェートヴェルチ分の穀物種子を収納できる俵のことである。昔の便覧をあれこれ読んでみると、「取引の上では、チェートヴェルチとは、小麦にして9.5プット、ライ麦にして6.25プット、大麦にして7.25プット、燕麦にして6プットの量を指すこととする В торговле принято, что в четверти заключается 9,5 пуда пшеницы, 6,25 пуда ржи, 7,25 ячменя, 6 пудов овса」となっていたことが分かる。そしてさらに先を読むと次のようなことが分かる。

〈オシミンカ осьминка〉、あるいは〈オシミーナ осьмина〉とは¹⁴、「半チェートヴェルチ」、あるいは105ℓの量を指す。

〈チェトヴェリーク четверик〉、あるいは〈メーラ мера〉とは、「8分の1チェートヴェルチ」、あるいは26.24ℓの量を指し、重量にすると穀物の種子ほ

¹³ これはフェドシュークの勘違いと思われる。テキストによれば、ベールキンが「1 チェートヴェルチの燕麦と引き換えに手に入れた」のは、「ゴリユーヒノ村 село Горюхино」そのものではなく、「ゴリユーヒノ村寺男の年代記 летопись горюхинского дьячка」だからである。

¹⁴ フェドシュークは「オシミーナ осьмина」ではなく「オシミンник осьминник」としているが、間違いだと思われる。「オシミンник осьминник」あるいは「オスミンник осминник」は、土地の面積を表す単位で、「 $\frac{1}{4}$ Дешачёрна десятина」(≒25 a)に等しいとされるからである。

ぼ1プットに相当する。

〈**ガールネツ гарнец**〉、あるいは〈**オシムウーシカ осьмушка**〉とは、「8分の1チェトヴェリーク」、あるいは3.3ℓの量を指す。

メーリニコフ=ペチェルスキーの短編『バラホノフ一族 Балахоновы』にはこう記されている——「そしてバラホノフ一族について、その倉庫という倉庫に何チェトヴェリークもの金をばらまき、何ガールネツもの真珠をとっかえひっかえ試着しているという噂が流れた И ходила молва про Балахоновых, что в кладовых своих они деньги четвериками пересыпают, а жемчуг гарницами меряют」。

ドリーがヴロンスキーとアンナ・カレーニナのもとにしばらく滞在した後、御者のフィリップはこう愚痴をこぼしている——「金持も金持、大した金持ちでしょうに、燕麦をたったの3メーラ[≒78.72ℓ]しかくれませんでした。[雄鶏が鳴く前にもうきれいさっぱり平らげてしまいましたよ。]3メーラぼっちでどうしろというんでしょうかね? ちょっとつまんだらそれでおしまいですよ Богачи-то, богачи, а овса всего три меры дали. [До петухов дочиста подобрали.] Что же три меры? только закусить.」[『アンナ・カレーニナ』6編24章]。

「チェートヴェルチ」と「チェトヴェリーク」、「オシミーナ」と「オシムウーシカ」を混同しないようにすることも大事である。それぞれ語形は似ていても、単位としてはまったく異なる言葉なのだから。

これら古い単位はすべて、研究者たちも指摘するように、場所に応じてその内実に様々な異同があったため、次第に重量単位に取って代わられ、姿を消していった。そして、メートル法の導入とともに穀類は「キログラム」や「ツェントネル[центнер=100 kg]」、および「トン」で測られるようになった。

5 節

液体容量の単位

Меры объема жидкости

まずは一覧表を提示しよう。

①	シカーリク (шкалик) コスウーシカ (косушка)		=0.06 ℓ
②	チャールカ (чарка)	= 2 シカーリク	=0.12 ℓ
③	チェトウーシカ (четушка) $\frac{1}{4}$ シトーフ (четверть штофа) ソロコフカ (сороковка)		=0.31 ℓ
⑤	半シトーフ (полуштоф) 計量瓶 (мерная бутылка)		=0.6 ℓ
⑥	シトーフ (штоф) ウクライナではクヴァールタ (кварта)		=1.23 ℓ
⑦	アシムーハ (осьмуха)	= $\frac{1}{8}$ ヴェドロ	=1.55 ℓ
⑧	チェートヴェルチ (четверть) チェトヴェールトナヤ (четвертная) ソロコヴウーシカ (сороковушка)	= $\frac{1}{4}$ ヴェドロ	=3.1 ℓ
⑨	ヴェドロ (ведро)	=10 シトーフ	=12.3 ℓ
⑩	ボーチカ (бочка)	=40 ヴェドロ	=492 ℓ

〈シトーフ штоф〉は、たんに液体 1.2 ℓ の単位として使われたばかりか、1.2 ℓ 入りの瓶——通常は角瓶——の呼び名でもあった。

古典文学の世界では、「彼はクリュチョクでウオッカを飲むように頼んだ Он попросил выпить на крючок」といったような、現代人の目には奇妙としか言いようのない表現にたびたび出会う。

〈クリュチョーク крючок〉としばしば呼ばれたのは、ワインを量り売りするときを使う、「チャールカ [0.12ℓ]」分の容量の柄杓である。この柄杓が固定された長い柄の先端には掛け金(крючок)がついており、柄杓はその掛け金を利用して樽や桶の淵に吊り下げられているのが常だった。ときに「チャールカ」は〈チェポルーハ чепоруха〉、「半シトーフ」は〈スクリヤーンカ склянка〉とも呼ばれた

こうした単位の大部分はアルコール飲料と密接に結びついており、ロシア文学でそれらの単位に出会うとすればアルコール関係においてである。今日では0.5ℓの容量を表す〈クルウーシカ кружка〉という言葉も、かつては液体(ビールや牛乳)の容量単位であり、今よりもかなり大きい、シトーフ、つまり1.23ℓ相当の容量を示すものであった。「クルウーシカ」の容量は20世紀に近づくにつれて次第に減少し、ついには「半シトーフ」、つまり0.6ℓにまで後退させられたのだった。

『知恵の悲しみ』のファームウソフ家におけるパーティーでは、あたかもチャーツキーが飲兵衛で、「年不相応の飲み方をした пил не по летам」かのような噂が広まっている(それはまるで、それぞれの年齢に応じて酒を飲むことができるかのようなものである!)。フレストーフが、「シャンパンをコップで何杯も飲んでいたわ Шампанское стаканами тянул」とすっぱ抜くと、ナターリヤ・ドミートリエヴナがこう訂正している——「何本もでございますわ、ご主人さま。しかも一番大きい瓶でございます Бутылками-с, и пребольшими」。一方またザゴレツキーは激烈な調子でこう断言している——「いいえ、ご主人さま。40ヴェドロ[≒500ℓ]入りのやつを何樽もやっつけたんでございます Нет-с, бочками сороковыми」。こうしてデマはデマを呼び、ついにはナンセンスにまで至っている[3幕2場]。

6 節

温度の目盛

Температурная шкала

今日、気温、水温、体温などの測定に使用されているのは、1度が水の沸点と氷の融点との差の $\frac{1}{100}$ に相当する〈摂氏目盛 шкала Цельсия〉である。この他に、1度が水の沸点と氷の融点との差の $\frac{1}{80}$ に相当する〈列氏目盛 шкала Реомюра〉というのもある。19世紀と20世紀初めのロシアでは、これら両方の目盛が機能していて、それぞれ「C」、「R」という記号で表示されていた。当時の文学では「摂氏」か「列氏」かが指示されることなど稀だったため、現在の読者はどうしても温度を摂氏目盛で考えがちだが、これは間違いである。革命前のロシアでは「列氏目盛」が圧倒的優勢を誇っていたことを考慮すべきである。両者の異同など大した問題ではないが、それでも正確に理解するために文学作品中に温度が現れるたびに0.8で割ってみるのがいいだろう。そのとき温度は読者にとって、より寒さを(もしも0度以下ならば)、あるいはより暖かさを(もしも0度以上ならば)感じさせるものとしてたち現れるであろう。たとえば、「列氏零下24度」が「摂氏零下30度」だと判明するとき、読者は心の底から登場人物たちに同情しうるであろう。「0度 ноль градусов」は双方の目盛とも同じ位置である。

ネクラソフの詩『天気について О погоде』に次のような一節がある¹⁵——

零下20度、おまけに風もあるが、

馬車なしの連中には徒歩しかない。

Двадцать градусов, ветер притом,

Бескаретные ходят пешком.

¹⁵ 『天気について』2部1章「主の洗礼祭時期の厳寒 Крещенские морозы」、2連5～6行目。ちなみに「主の洗礼祭 Крещение」あるいは「神現祭 Богоявление」とは旧暦1月6日(新暦1月18日)のことだから、「主の洗礼祭時期」とはおよそ1月下旬と考えてよからう。

フェドシューク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その4)(鈴木淳一・岡部由佳・小林慎吾・村松多恵子)

この「零下20度」は「摂氏」で言えば「零下25度」のことだが、これは散歩向きの天気ではないということである。